

2016年12月
1114号

一冊の会 Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5
(一冊の会研究室)

レソト王国王妃陛下の児童養護施設視察

11月22日午後、マセナテ・モハト・セイソ レソト王国王妃陛下が調布市児童養護施設・二葉学園を訪問されました。一冊の会の大槻会長、小山副会長が事前に学園を訪問して小倉施設長に面談し、王妃陛下と子どもたちの心が触れ合う訪問となりますよう綿密に打ち合わせをされて当日を迎えました。

二葉学園は調布市の住宅街の細い道をたどる奥まった場所にあり、王妃陛下のお車の無事の到着を察じましたが、予定時刻より早いご到着に子どもたちがレソトの国旗を振りながら、館内から元気に飛び出してきました。子どもたちとともに園長、職員の皆様、外務省、厚生労働省の担当の方、そして一冊の会から大槻会長、小山さん、三坂が加わってお迎え致しました。お車を降りた王妃陛下のお優しい笑顔に、子どもたちの緊張もとれ、握手とお言葉を交わしながら入館されました。

ホールで、園長より二葉学園の歴史、理念、目的などの説明を受けられて早速園内を一部屋一部屋、丹念にご見学されました。二葉学園は明治の創設から115年の歴史があり、様々な家庭の事情で親とともに暮らすことが困難な2歳から18歳の子どもたちが短期、長期にわたって共同生活をする施設です。

その理念は子どもの権利を守り、自立を支援し、家族とともに協働して子育てをし、こどもを取り巻く関わりを大切に、さらに地域の子育てネットワークの発信地となることです。園内のいたるところに、その理念を活かす工夫があり、王妃陛下は各部屋の目的を質問されながら大変熱心に視察されました。



遊戯ルームでは子どもたちをハグされて、可愛い熊のぬいぐるみ数点をプレゼントされました。大喜びの子どもたちと心がふれあう暖かい時間が流れました。当日入居した子どものために、職員さんがスペシャルメニューの夕食を調理しているところに出会い、施設の子どもの守り育てる愛情と情熱を強く感じました。同時に子どもの気持ちが落ち着く為の部屋や、親の訪問時に家庭と同じよう過ごせる部屋などに、子どもの抱える問題の深さも胸にささりました。

王妃陛下のご表情にも、こうした状況下にある子どもたちへの深い慈愛が溢れておられて、一人の母親として子どもを見つめる暖かい視線に、恐れ多くも王妃陛下を大変身近に感じました。

王妃陛下と子どもたちの交流の時間は瞬く間に過ぎホールに戻りました。園長の王妃陛下訪問への感謝の辞を受けられて、王妃陛下から園長はじめ施設の皆様の運営への努力を讃えられました。子どもたちの入居の理由をご質問されて、多くが親の虐待であるとの説明に、レソト王国では虐待もあるが、そ

れ以上にエイズによる親の死去で多くの孤児がいることをお話になりました。未来の希望である子どもを育む環境づくりの大切さを語られ、こうした活動が世界中に広まることを願う王妃陛下のお優しいお言葉で訪問の時間が終わりとなりました。

施設の門でお別れの時間を惜しむように、子どもたちにお言葉をかけ記念撮影もしていただきました。

レソトの旗を一生懸命振りながら王妃陛下のお車を見送る子どもたちの笑顔。遠いアフリカ、レソト王国王妃陛下のご訪問と触れ合いは、きっと子どもたちの世界を広げたことでしょう。そしていつの日か大人になった彼らの誰かがレソト王国を訪ねて欲しいとの願いを胸に、あらためて同行させて頂いた感謝で一杯になりました。

「手をつなぐ、笑顔をつなぐ、未来へつなぐ 未来に向かって自分らしく歩いていこう」頂いた二葉学園のパンフレットの表紙の言葉です。レソト王国の子どもたちと日本の子どもたちの手と笑顔を繋ぐために、未来にむかって世界中の子どもたちが自分らしく歩いていけるように、一冊の会はこれからも前進を続けてまいります。

※一冊の会では、2010年ユニフェム（国連女性開発基金）国内委員会が、ドメスティックバイオレンスにNO！と言おう。のキャンペーンに参画。「エイボン基金」助成金事業を受け「NO！DV」全国キャンペーンを実施。この事業を冊子にまとめ、常日頃学び合っております。

